長崎紀行

三川支部　中尾種夫

▽グラバー邸

『チンペル、ツュンベリーよ、見られよ、君たちの植物がここにくる年ごとに、緑そい咲いでてそが植えたる主をしのびては、めでたき花のカツラをなしつつあるを。一八二六年（文政九）シーボルト』

出島オランダ商館跡の植物園に建てられた記念碑には、近代日本の恩人であり、アジサイの花をこよなく愛したシーボルトの手によって、館付医官として来住し、日本の文化発展に寄与し、日本ならびに日本の文化を海外に紹介した二先輩の功績がこのように賛えられている。

グラバー邸には、薩摩の大名より贈られたという蘇鉄が茂り、県花のツツジをはじめ泰山木、アオイ、バラ、ナデシコ、アマリリスなど、色とりどりの五月の花が咲き競い、絶え間なく訪づれる観光客の眼を楽しませていた。

文久年間（一八六一〜一八六五）の建築と推定され、日本最古の洋館であるクローバー型の家屋には、グラバー家に関した遺品や絵画などが陳列されてある。英人トーマス・グラバーが二十四才の若さで上海より長崎にきたのは、鎖国の夢破れた安政六年（一八五九）九月であった。

この青い眼の政商は日本婦人ツル子と結婚、鉄砲・火薬・軍艦などを輸入して西南雄藩と取引きし佐賀藩と共同で高島炭鉱の開発、三菱造船所の前身である小菅修船場を経営、大阪造幣局を開設したり、大浦海岸に最初の蒸気機関車を走らせて人々をおどろかせた。

坂本龍馬が海援隊をつくり、伊藤、井上、高杉など、維新の俊傑が相ついで来遊し、幕府に追われた桂小五郎（木戸孝允）が天井裏に隠れて難を逃れたのもこの邸である。彼は維新政府成立に協力し明治初期の産業経済に貢献した功によって勲二等旭日章を贈られ、明治四十四年七三才で栄光の生涯を閉じた。

さらにこの邸を有明にしたのは日本が生んだ世界的プリマドンナ三浦環が、伊作曲家プッチニーの長崎を主題にしたオペラ、マダム・バタフライ（蝶々夫人）を三十年にわたり、世界各国で歌い続け美しい名曲を通じて広く海外に日本婦人の愛の美徳を紹介したことである。庭園の一隅には、和服を着た外人の子どもに、港を指さしている環の像が立っていた。

「あそこに見える白い船が、日本で一番大きな自衛艦だそうです」タクシーの運転手が新婚旅行らしい二人に説明しているのを聞いて、私は戦争の残酷さと悲劇とを回顧せずにはいられなかった。

倉場富三郎（トミー・グラバー）は明治三年、トーマス・グラバーの一人息子として生れ、日本に帰化して学習院に学び、遠洋漁業を開拓したりした。真珠湾攻撃と同時に、この町に住むすべての外人はスパイとして疑われ、意味のない迫害は目の色の異った人たちに容赦なく降りかかり、それがいかに厳しかったことは、次々に自殺者を出したことでも理解できる。

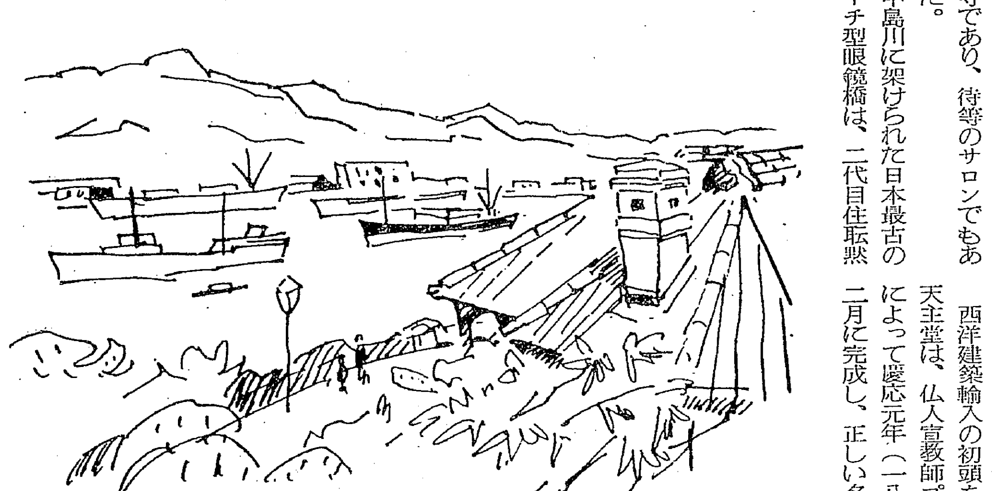
日常は図書館に通ったり、魚釣りをしたり、外人の集まりに加わったりしていた富三郎も、憲兵、特高の無理難題を受け、ついに絶望の果て恨みをのみ、昭和二十年八月二十六日に南山手九番地の自宅で首をつってしまった。

戦争の苦しい悲しい思い出は、容易に消えるものではない。憲法を改悪して再軍備を急ぎ、国民を戦争の危険にさらさんとする反動政府への反撥、怒り声がグラバー邸にも秘められているのを感じるのは私だけであろうか。

▽二つの唐寺

寺町付近には同じ黄バク宗であり、純粋の明末清初の建築様式濃厚な二つの唐寺、赤寺がある。崇福寺は長崎在留の福州人が、寛永六年（一六二九）僧超然を招いて建立した菩提寺、入口の赤い三つの楼門は俗に龍宮門と呼ばれ、総丹塗の壮麗な大雄宝殿（本堂）は中国で切込み船載して、仏像、美術品とともに運ばれたと伝えられ寧波の工人の作る第一峰門（中門）の三栗栱の組物は、複雑のうちに統一をもち、極彩色のこの組物の制はわが国では他に類例のない貴重なもの。大宝雄殿と第一峰門の建造物は、数少ない九州の国宝に含まれている。寺の裏山には石棺を伏せた中国人の墓が散在しており、その何割かは渡航途中に歿したものという。

興福寺は元和九年（一六二三）明僧真円禅師が開基、わが国黄バク宗の開祖隠元禅師が明から渡来し、宇治万福寺に移るまでここにとどまり、彼の名声を慕う全国各地の僧侶は堂にあふれた。大雄宝殿の構築といい、石畳と芝生の調和した前庭の趣きといい、大陸風のゆったりした雄大さをもっている。境内には唐人街の住宅門、長崎聖堂の遺構、三江会所門が保存されてある。南京寺として親まれるこの寺は、揚子江下流の江蘇、セツ江、江西三省地方出身者の菩提寺であり、待等のサロンでもあった。



中島川に架けられた日本最古のアーチ型眼鏡橋は、二代目住職黙子如定の造ったもの。三百余年間数十回の洪水にもゆれることなく日中親善の役割を果してきた。江戸時代の人々は、清の書籍を通じて西欧の先進科学である天文、地理、博物、医学などの無形の技術を導入したものである。

この町の年中行事であるペーロン、中国盂蘭盆会、蛇踊りが盛大に催されているのを見ても、中国との交流がいかに深かったが想像されよう。数千年来のよき教師であり、もっとも親しかった隣人と絶縁し、敵対視する現状を二つの唐寺はどのように考えているであろうか。だが悠久たる大河の流れをせきとめることは不可能である。

日中国交が回復し、上海通いの定期船がこの港をにぎやかすのも遠いことではあるまい。航海安全の神である天后聖母を祀るマソ堂、年輪を経た鐘鼓楼、すりへった魚板にも両国の親善を願う声が聞えるようだ。私は同胞の狭量と無智を謝罪しながらこの寺を辞した。

▽大浦天主堂

大浦天主堂は中世ヨーロッパの建築様式をそなえ、随所に日本的技法を応用した日本に現存する最古のすぐれたゴシック建築であり異色ある国宝の一つに数えられている。入口に立つ清楚な聖母像、堂内には二十六聖人殉教の油絵が描かれ、正面の緑、赤、青色のガラスは陽光を映じて虹のように輝やき、礼拝堂の幽暗とマッチして訪づれる人の眼を奪う。

西洋建築輸入の初頭を飾るこの天主堂は、仏人宣教師プチジャンによって慶応元年（一八六四）十二月に完成し、正しい名称は日本二十六聖人殉教者堂、別名はフランス寺といわれた。慶長二年（一五九七）三月、秀吉のキリシタン禁制によって京都、大阪で捕えられて長崎に護送されたイスパニヤ神父など六人の外人と、パウロ三木など二十人が駅前の西坂の丘で十字架にかけられ、日本キリシタン史最初の鮮血を流した聖人のために建てられたことは説明するまでもない。

異国情緒豊かな美しい天主堂に集まって、キリシタン復活に狂喜した浦上の信徒に大検挙が加えられたのは、二年後の慶応三年である。この禁圧政策は翌年成立した新政府にも引継がれ、民衆の蜂起を何よりも恐れた当局は、浦上の信徒七百人をはじめ県下一帯の信徒三千人を捕えて、尾張以西の各藩に配流した。

信仰の自由に対する弾圧は、列国外交団や在留外人の悲難と抗議をまき起し、頑迷な政府が信仰の自由をしぶしぶ認めたのは明治六年になってからである。その間六百余名の信徒は信念を曲げず、さまざまの惨苦のうちに他郷で客死した。しかも弾圧の先頭に立ったのが木戸孝允であったのも皮肉である。焼き払われ、刈り取られた野の雑草ほど、強くたくましく成長するという事実を、支配階級者たちはいまだに反省しようとはしない。いわれない弾圧や迫害は反抗の炎となって、りょう原の火のように燃え拡がるであろう。

▽如己堂

原爆第二号落下中心地に近い平和祈念像、戦後再建された巨大な浦上天主堂、その二つを直角に結ぶ地点にあるのが、故永井博士宅である。今は市立永井図書館となっており、書斎だけが当時のままに保存され、次のような案内板が立っていた。

『原子野の科学者名誉市民永井隆博士遺宅。長崎医大卒後、同大学助手、物理的療法科勤務中原爆の洗礼を受け、レントゲンのため骨随性白血病にかかったが、原爆被災者救助のために臥しながら、科学者としての不屈の研究心とカトリック信徒としての燃ゆる信仰心をもって、原子病概論を完成、十余冊の随筆を世に出す。昭和二十六年五月一日永眠。原爆で愛妻を奪われ、後二人の幼子と共に最後まで生活した家で、数多い著書も、ここで病臥のまま書かれました』

書斎といっても内縁つきの二畳敷きのせまい部屋で、片すみには一脚の机が祭壇替りに置かれ、十字架、女神像、自筆の俳句などが乗せられ、壁には天皇陛下が見舞われた際の写真や絵が掛けられ、本棚には「長崎の鐘」「いとし子よ」などの著書と、原稿が山積されてあった。小さな如己堂の石柱のそばに咲くユッカ蘭の白い花を眺めながら、私は幼なかりし日のカヤノさんの話に目頭を濡らしたことを思い出す。

「お家のそばへ原爆がなんべんも落ちたので、私と兄さんとは木場の山の家へ行かせられました。浦上からお母さんが私のモンペを作って会いに来ました。「この次にはテンプラとお饅頭を作ってもってくるよ」といって私の頭をたくさんなでて、急いで山を下ってゆきました。私がお母さんを見たのは、それがおしまいでした。寒くなってから天主堂の崩れた所で死んだ人みんなの大葬式がありました。白い十字架が八千本ならびました。十字架の数の方が集まった人の数より多かったのでみんな泣きました。〝マリナ永井緑、一九四五・八・九死〟十字架にお父さんの書いた字が私にも読めるようになりました」。

シーボルト宅跡の売店の老婆は私に「カヤノさんは大浦天主堂に奉仕して、原爆で亡くなった十余万の人たちの冥福を祈っておられます」と話してくれた。神の恵みがどのように偉大であっても、無限な父母の慈愛とは比較になるまい。孤児たちがどんな境遇にあろうとも、幼なくして父母を失った悲しさ、淋しさは生涯消え去ることはないであろう。今年の原爆禁止大会もいくつかに分裂し、外国の代表者や国民をとまどわせたと聞く。いかなる国の核実験、核武装にも反対し、被爆者救援運動を展開せずして大会の意味はない。あくまで自説を強調する醜態は心ある人々の憤まんと冷笑を買うだけである。

元禄のはじめ故郷の長崎をたずねた俳人向井去来が、親類知人に見送られて京都に向った日見峠。この峠に立つ無名の私には名残りを惜んでくれる者はいない。私の脳裡に浮ぶものは、激しかったあの三池争議の最中、三菱造船所の組合員や主婦たちが、炎暑をいとわずバスを連ねてホッパーを死守する私たちを激励してくださったことである。

いまもその人たちは暖かい声援をおくり、私たちの行動を見守っていることを確信すると共に、この町の仂らく仲間たちの健斗と多幸を祈らずにはおられなかった。

激電

遺族の抗議・座り込みおよび「初盆供養追とう大集会」にたいする支援の電報は、計六三通に達し、三池のたたかいの拡がりに感謝しよう!!

▽　△

三井資本の合理化により、三川鉱大変災の犠牲となられたわが労仂者の同志の初盆に対し、心から供養申しあげます。

ガス中毒患者の療養訪ソ団

大災害犠牲者の初盆にあたり遺族ならびに三池労組のみなさんに心から激励を送る。みたまとともにあくまで斗い抜き、誓って勝利を斗いとろう。総評は常にみなさんとともに斗う。

総評

あののろわしい大災害によって、一瞬にしてその生命を奪われた方々につつしんで哀悼の意を表します。災害以後すでに九カ月を経た今日においても、会社の施策は労仂者に苛酷な条件を押しつけ、なかんづく遺家族に対する冷遇はまさに言語同断というほかありません。

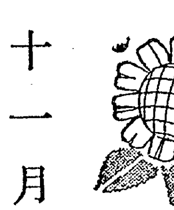
本日の合同慰霊祭に際し私たちは遺族の怒りを全労仂者の怒りとして、今は亡きかずかずの犠牲者のみたまに対し、炭労をあげて生命を守る斗いに立ち上ることを誓います。

炭労

御遺族のみなさんの悲しみは私たち一同の悲しみです。みなさんの怒りは全労仂者の怒りです。独占の合理化の本質を今こそかみしめ、スクラム固く、あくまで勝利を目ざしてたたかおう。本日の御供養にわれわれの決意をおくり、犠牲者の御めいふくをいのる。

社会主義協会　**向坂逸郎**

＝詩＝



十一月九日

四山　岩下武文

忘れもしない一九六三年十一月
九日土曜日午後三時十五分
日本一といわれた三川鉱の大爆
発きのこ雲のようなまっ黒なフ
ン煙戦争じゃないんだ！
と呼んだ

あれから九ケ月
いまだ立ちあがれない
親・兄弟・友だち

死んだ親・兄弟・友を思い浮か
べ誰ともなく話しかける
しかしむなしい魂は
誰も答えてくれない
生きていたら
暑い夏だネ
と言ってくれたろうに

八月十五日初盆

四五八名のみたま
三井とその黒幕の合理化の犠牲
者となった炭鉱労仂者

かぎりなくつづく合理化の波に
全労仂者と共に
押し倒されないように立ちはだ
がろう
安全より生産だ
人命より出勤だ
と
四五八名の犠牲の上に
再び三川鉱の三井の
あのいまわしい悪夢のような大
爆発
十一月九日を繰返してはならな
い四五八名のみたまが安らかに
眠れる日のため
全労仂者のため
うでをくもう

十一月九日を忘れないだろう
四五八名の死を無駄にしまい
どうしても
苦難の道を切りひらこう

十一月九日は忘れない！
四五八名の死は忘れない！
脳裡にやきつく惨事
誰が忘れられよう

十一月九日を忘れないだろう
十一月九日は忘れない！
四五八名のみたま
初盆を迎えて安らかに
ねむって下さい

感想文

石坂先生

「おい、これでフロに入ってこい」と、授業時間中、五銭白銅貨を、無雑作に、ひびの切れた私のてのひらにのせて下さった石坂先生——。

○

雑記帳から、クレオン、鉛筆、すずり、墨、紙一枚に至るまで、先生からはよく、めんどうを見てもらった。

○

ある日、算術に弱い私は、級長と二人、黒板を前にして教壇の前に立たされた。級長は暗算で、私は十指で算え、二人で足し算をさせられた。そのとき、まさかと思う私が級長に勝ってしまった。私は有頂天だったが、そのようなときも、やさしくほめることを忘れなかった先生。

この先生から私は叱られた記憶がない。少しでも貧乏にめげず素直に育てようという先生の温かい気持ちからではなかったかと思われる。

先生からは二年有余教わったが、先生の温かい体臭をひとときも忘れることはできない。

いまもなお、先生の人間味がほのぼのと私の体内にただよい、私のすべてを支配しているように思えることも不思議ではない。

（宮浦・高椋竜生）

〝手をつなごう〟

宮浦支部　高椋龍生

どんなときでも
いつでも　どこでも
だれとでも
かたりあおう
悩めるときこそ
かたりあおう
いつか　きっと　きっと
しあわせがくる
力になって
がんばろう

どんなときでも
いつでも　どこでも
だれとでも
手をつなごう
苦しいときこそ
手をつなごう
いつか　きっと　きっと
しあわせがくる
力をしぼって
がんばろう

憶あれから二十年

四山　宮村利男

今日も黙々と差別にたえながら
暗い坑道を下る
足は黒い壁に突き当る
ある日は飢餓から脱れるために
ある日は敵の目をさけるために
ジングルの中で繰り返えされた
地獄編
俺は二本の足で歩いた　走った
それは遠い昔の話ではない
今日も何処かで起きている
人と目分の違いだけなのだ
大人達よ　そんなにワッペンが
欲しいのか
そんなに勲章がうれしいのか
子供達を笑うなよ
子供は大人を見つめている
父母よ　妻よ　子よ　兄弟よ
君達の一番大切な人々が
最後に欲しいと言ったのは
一杯の水と飯と平和なのだ
兄等恐れるなかれ
俺達は生きた証人だから
平和の鳩をしっかりと
にぎっていた筈なのに
手を開いて見たら空だった
平和の鳩よ
今日もお前は何処にいる

決意

黙っていては殺される
叫べ！
私たちは豚ではないぞ
牛でもない犬でもない
人間なんだ
俺たちだって
生きる権利がある
奴らは
むごいやり方で
俺たちの手から
多くの肉親を奪い去った

〝三時十五分〟
この恐怖と悲しみの一瞬
怒りの一瞬
憎しみの一瞬
私たちは決して忘れない
そうして二度とくり返すまい！
この
どよめきの中から
立ち上がらねばならぬ
そして
大地に足をふんばって
スクラムを
がっちり組みなおそう

〝三時十五分〟
この時から
私たちの
きびしく激しい斗いは
火ぶたをきるのです
今こそ
全国の仂く仲間よ
若者よ
一つになれ
こぶしを集めるんだ！
炭で汚れた俺のげんこつ
内職でカサカサの母さんのこぶし
可愛い小さな子供のこぶし
怒りのげんこつ
うちふるえ
つき上げろ
空につき上げた
俺たちの腕が
明日の幸せを
わしづかみにする
きっと!!

（新港町青年会機関紙より）

随想

新しい連帯の模索（一）

竹松清

私は八方美人であり、拝金主義者であり、まあまあ型であり、封建的であり、優柔不断であり、全くもって鼻もちならない男である。

そんなくだらん男の思索などおっしゃらずに、このようにふやけた私だが、自分の弱さ、古さを本当に、苦しく悩ましく思い、これと斗かわずにはいられないという心情だけはもっているので、その点でご容赦願いたい。

就労後、多くの仲間が戦列から陥ちた。ある者は「もうダマサレン」と憤然と去り、ある者は「馬鹿ラシカ」とニンマリ笑い、鮮やかに変節し、ある者は「背ニ腹ハ変エラレン」と泣く泣く陥ちた。

信じていた友に裏切られ、時間の問題と目されていた仲間が、いまなお頑強に斗かっている。「去るも地獄、残るも地獄」のきびしさの中で就労後の数かずの体験は、私をして人間の問題をあらためて考えなおさせた。

▲▼

人間のむつかしさは「……と同時に……」というところにあるようだ。

たとえば、人間は理性的動物であると同時に感情的動物である。人間はつくられたものであると同時に自らつくるものである。人間は個人であると同時に社会の一員である。人間は有限に足を下しているが、同時に無限に憧れる。

などと、それはいろいろな形でいえる。肉体と精神、理知と情熱、利己と他己、神性と獣性、学問と常識などなど。

人間が矛盾的存在といわれるのも、自分が自分の主人公となることのむつかしさも、ここにあるようだ。しかしながら、この対立は根底において密接に結びついている補足的他物ともいうべき対立である。

一方をつきつめていくと、いつのまにか、他方の領域に足を踏み入れており、対立というも、もともと私という「個」の生命力から発しているからである。

▼▲

われわれは日常的には、双方を適当になだめすかして、一つの調和、秩序というものをつくり、それによりかかって生活している。

それは今日まで生きてきた体験の中から割り出したものであり、手汚のしみた、扱いなれたものである。これが習慣の世界であり、第二の自然といわれている世界である。

この一応の安定の上にたって、カンを仂かせ、その触覚を頼りに生きてきたわけだが、この安定がきびしい情況の切りこみによって大いに動揺し、安定の歯車が分裂しかみ合わなくなることがある。三池における差別支配の各個撃破の攻撃は、その典型の一つであろう。安定が崩れると対立物が、それぞれ自己の優位を主張してゆずらず、対立が激化する。対立の激化は形（型）の喪失を意味する。人間は一つの型、形の上に腰を下さないと不安を感ずる生きものだから（型の魅力はわれわれの想像以上である）そこで新しい形が求められるということになる。

激化した対立物をいかにかみ合わせるかということが、切実な課題として解決を迫ってくる。

対立物が自己主張の力をもつためには、情熱を燃焼せしめてそのエネルギーを吸収しなくてはならない。

対立の一方がふくらむと、他方はその分だけ押しちぢめられ、圧縮されることによって密度が高くなり、隙あらば一挙に態勢をばん回しようとイライラを内包する。

このような対立の激化は、外部からの踏みこみだけでなく、内部からの切りこみによってもひき起される。

一応の安定をつくりだしている習慣の場は、障害と摩擦の場を回避して安逸を求め、そこではあきらめと忘却が主役となって構成された世界である。

したがってそこでは、自らつくる面が不当に圧迫されている。この場合の内部の切りこみは、退屈という不可解な魔物である。

退屈は、平板、単調、無意味、無気力などによってあらわになってくるシロモノで、虚無の深淵をのぞかせるだけでなく、灰色のもやで世界を包み、光を奪い、色彩をかき消し、けんたいの泥沼にひきずりこむのである。

人間はこの魔物の来襲を予知するや、ただちに行動を開始する。行動の開始によって対立が激化し分裂した歯車の新しいかみ合いに没頭することによって逃れることができるのである。このような内外の切りこみによって生じる対立の激化を、別の言葉でいえば「人間いかに生くべきか」という問題を背負いこむということである。この問題を緊張せしめ鋭くしているのが、生の一回性、つまり「人間は死への存在である」ということによってである。

紙数がつきた。またの機会に。

俳句

〝妻〟

宮浦・高椋竜生

夏やせて生きとし生けるものに妻
炎天が言う妻の愚痴きいてやれと
妻ありて吾あり坑内に汗をふく
寝ころべばすぐにいびきや蚊帳の妻
ぐったりと妻の寝たきり祭の夜
日焼妻手相にトカゲつかみをり

原爆忌

八時十五分の鐘鳴る原爆忌
ききょうの花紺色に原爆忌
坑口に捧ぐる黙とう原爆忌
原爆の図絵生々しや原爆忌
「ふたたびこのかなしみをくりかえしません」原爆忌
いかなる国の実験も許さじ原爆忌
芙よう咲きしぼむ夕べや原爆忌
くつわ虫夜を鳴き出でし原爆忌

声なき鉱友

四山・清水はるき

声なき鉱友に盆灯個々に遺児光らす
碑の前に納灯幼なき掌にたつる
初盆に集ふや巨し仲間達
七夕におさなく綴る三池の霊
平和の歌遠し夏雲身に重し
セミの森埋めて三池の遺児育つ
汗ためてふくや鉱友らいつ癒ゆる
基地の飛行機発ちて声なす原爆忌
坑内水に染めし合掌地に低し
炎天にキョウホ吹かれて遺児育つ

＝詩＝

生きる

三川　大阪間貞信

ごぼう抜きが始まった。
「ポリ公、帰れ」の声が乱れ
ワァーッと
機動隊の乱斗服へ
汗に濡れた体ごとぶっつかった
久しぶりに
三一三日がよみがえる
六月三〇日
暴力団が賛成するとおしかけた
「小暴力防止条例」強行採決の日
ひっぺがされたあとも
孤立感に沈まず
笑い合い
一本のタバコ
一パイの水に
サビついた舌を溶かす。
四五八名の無口と
その家族
三井独占に怒る
涙を
旗の端で、ソーッとふき
新しい自分をみつめる
きょうも
坑で
汗を吸いとられた
かさかさの体が集まり
いっぱいの悩みが語られる
やがて
バイクの音が去り
自転車のライトが消えて
静まる
無口な人ののこした
湯のみに
茶柱が浮ぶのを見る
今日、一日の終りは
はりつめた神経のたわみと
あくびで終る。